

神話に見る英雄の神性

関 丙 勳*

(e-mail: mbh0301@dju.kr)

目 次

- 1、はじめに
 - 2、誕生の様相
 - 3、成長過程と英雄の条件
 - 4、おわりに
-

一、はじめに

韓国の建国神話と日本の建国にかかわる神話とを比較するとき、普通、その共通点から、神話の発祥地を求めたり、史的観点での影響関係の有無や源泉を探るものが多い。大林太郎が「王権神話の分野で類似が見られるのは、古代における王侯文化ないし支配者文化に何らかの親縁関係が存在した結果だった蓋然性が高い¹⁾」と指摘しているように、確かに韓国と日本の建国神話からは話素となるものに類似性が見られ、神話が作られる以前から半島と列島における繋がり、あるいは交流があったことには疑う余地がなく、それとともに、神話における何らかの分母たるものが見られるのは当然かもしれない。

両国の神話の類型として、男主人公の逃亡や派遣の形を帯びる流離譚と、女の主人公の閉鎖された空間での籠もりの様子が数話に織り込まれていることが見てとれる。また、若干の差はあるが、大雑把なところ、男の流離には以下の決まった幾つかのパターンが示されていることがわかる。まず、流離する男の身分が嫡子や長子ではなく、庶子や次子以下の権力から疎外された人物であるという点、それから流離する男はおおかた十五、六の

* 大田大 學校 日語日文學科 副教授、日本古典文學

1) 大林太郎「日本神話と朝鮮神話—支配者文化を中心として—」『講座日本文学 神話下』所収、1977、pp.56~57

少年的なイメージが強い点。そして、流離の原因となるものが罪による制裁の場合は追放や派遣の形を示しており、迫害の場合は避難あるいは逃亡の形を呈するという点。その内、日本の神話の特徴として、追放や派遣の場合は最終的に本郷に戻ってくることはないが、迫害による場合は帰還して支配者になる構造を有している点を挙げておきたい。

一方、男性の流離に対して女性の場合は、閉鎖された空間に監禁されたり籠もったりするような話型が建国関連の神話に表れていることがわかる。籠もりは結果的に生産や再生に繋がっているが、その原因を語るころはそれぞれ趣を異にしている。もっとも、たいていの場合、結果は、試練を通して祝福が齎されるという形になっているが。

以上は、種々の神話の表面を彩る共通点だが、話の流れにおける英雄の誕生や成長の過程に焦点をあてると、神話の自立、ないしは成長を読み取ることができる。

本稿では、以上で取り上げた神話に見られる典型を下敷にはするが、共通点もしくは差異点によって、両国の神話が生成される時期から密接な関係にあったとか、なかったとかというはさておき、あくまでも話型の特異さと、明確に対照される話のパターンに注目して、それぞれの神話が持つ独自性のほうに論の中心を移して論じた。ことに、檀君以下、韓国の初代王とされる人物と、須佐之男命からはじまる出雲を含んだ葦原中国における神話の人物の、誕生から成長にかけて確認される神性の有り様に焦点を当て、その相違点を追究した。ちなみに、題目で示したように、それらの神話の主人公となる神や人を一括して「英雄」としたことを断っておきたい。

二、誕生の様相

韓国の神話には、建国主、すなわち国の始祖となる者の奇妙な誕生の様相を記しているものが多い。ことに、超人的な神格が強調されている場合が目立つ。たとえば、『三国遺事』の古朝鮮の建国神話は、「魏書」を引用して檀君朝鮮の始終を語っている²⁾。

帝釈天の桓因の庶子である桓雄が地上に降臨して人世を治め、教化していくなか、一つの洞穴に棲みながら人間に転生したいと願う熊と虎がいることを知る。桓雄は大蒜と蓬を与え、百日間、日を避けて洞穴でそれだけを食べればやがて人間になれるだろうという。結果的に二十一日後に熊のほうが女の人に生まれ変わり、神雄と関係を結び、古朝鮮の始祖たる檀君王儉が生まれ出るのである。檀君が生まれてからの桓雄の様子は語られることなく、檀君が都を定め、幾度か遷都し、寿命が千九百八歳の時、阿斯達に帰って山

2) 「魏書云。乃往二千載有檀君王儉。立都阿斯達。経云無葉山。在白州地。或云在開城東。今白岳宮是。開国号朝鮮。与高同時。」ここでの魏書とは今に伝わるものとは別の物とされる。(李丙燾訳註『訳註原文三国遺事』紀異卷第一、古朝鮮王儉朝鮮、p.27、乙酉文化社、1992)

神になったと記している。

ここには、檀君の誕生に纏わる奇異さを通して、支配者としての正統性を確固たるものとしようとする意図が見受けられる。ただ、生まれてからの非凡さなどについての言及はなく、山神になる時の寿命には人間の想像を絶するものがある。

新羅の始祖とされる赫居世の誕生に纏わる神話にも確然たる神格が窺われる。辰韓には六部があり、その祖上たちが子弟たちを連れて闕川岸上に集まり、百姓を治めてくれる君主を待ち望む時、奇妙なことが起こるのである。

三月朔、六部祖各率子弟、俱会於闕川岸上。議曰。我輩上無君主臨理蒸民。民皆放逸。自從所欲。盍覓有徳人、為之君主、立邦設都乎。於是乘高南望。楊山下蘿井傍、異氣如電光垂地。有一白馬跪拜之状。尋檢之。有一紫卵。一云青大卵。馬見人長嘶上天。剖其卵得童男。形儀端美。驚異之。浴於東泉。東泉。寺在詞腦野北。身生光彩。鳥獸率舞。天地振動。日月清明。因名赫居世王³⁾。

すなわち、楊山の下、蘿井の傍に奇異なる気運が電光のように地に照らされ、そこで白馬が何かを拝むような姿勢をとっている。近づいて見ると、そこには紫色の卵があり、白馬は人を見て長く啼いたあと天に上ってしまうのである。卵を割ってみると、中から容貌端正な美しい童子が出てくる。不思議に思い、東泉というところで沐浴させると、体から光彩が放たれ、鳥と獣が共に舞い、天地が振動して、太陽と月が清く明るく照ったと書かれている。童子はやがて后を得るが、この後は闕英井という井戸の側に現れた鶏籠の左の肋骨から生まれた、とある。まさに旧約聖書の「創世記」にある、アダムの肋骨でつくられたエバの話のような内容なのである。人々は二人を二聖としたとあり、二人の結婚と国号についての説話はそのあとに続く。

新羅の赫居世誕生の神話にも、古朝鮮の檀君と同じように、生まれたときの神性が強調されており、やはり成長の様子は一切語られていない。寿命が尽き、昇天と葬儀に関連する話があって、そこで終わっている。このように、韓国の建国神話は大概、生まれるときからの超人性及び貴人性を浮き彫りにし、支配者としての強力な威厳を付与しようとする意図が見てとれる。

ところで、高句麗の始祖とされる朱蒙の話のなかにも同様のモチーフが容易に見出される。

(前略)金蛙異之、幽閉於室中、為日所炤、引身避之、日影又遂而炤之、因而有孕、生一卵、大如五升許、王棄之与犬豕、皆不食、又棄之路中、牛馬避之、後

3) 注2)の「紀異」巻第一、新羅始祖 赫居世王、p.35

棄之野、鳥覆翼之、王欲剖之、不能破、遂還其母、以物裹之、置於暖處、有一男兒、破殼而出、骨表英奇、年甫七歲、嶷然異常、自作弓矢射之、百發百中、扶余俗語、善射為朱蒙(後略)⁴⁾

すなわち、扶余王の金蛙によって室の中に幽閉された柳花の身に日光が差し、懐妊するようになって、そこで五升ほどの卵を産んだとある。新羅の赫居世と同じように、朱蒙の場合もいわゆる卵生神話の形を取っているが、究極的には天帝の子の解慕漱を父とし、河の神の河伯の女の柳花を母とする朱蒙の生まれ方を強調するためのものであろう。しかも、王によって棄てられた卵は、犬も豚も食わず、牛と馬は避け、鳥は羽で覆ったとある。動物までもがこの卵を神聖視しており、王が割ろうとしても割れなかったのである。ついに殻を割ったのは中にいた男児自らであり、外貌が優れ、七歳にして弓矢を作って射ると、なんと百発百中だったという。つまり、生まれた時から統治者としての資質や力量を兼ね備えていたことを強調しているのである。

また、『三国遺事』巻二の「駕洛国記」の首露の誕生の話にも類型が確認できる。開闢以来、国号や君臣の称号も無く、九個の部族の長である九千が、百戸、七万五千人の人民を抱えて生活している時、亀旨というところから怪しい声が聞こえてくる。そこへ行ってみると、その声は、「皇天から、ここに来て国を建てるようにと命じられた。汝らは峰の頂で土を掘りながら歌舞をすれば、王を迎えられることになり、歡喜勇躍することになる」という。それを聞いた長の九千らは、言われたとおりに呪文のような歌⁵⁾を唱えながら舞踏をするのである。

(前略)九千等如其言。咸忻而歌舞。未幾仰而覩之。唯紫繩自天垂而着地。尋繩之下。乃見紅幅裏金合子。開而視之。有黄金卵六、円如日者。衆人悉皆驚喜。俱伸百拜。尋還、裏著抱持而、歸我刀家。寘榻上。其衆各散。過浹辰。翌日平明。衆庶復相聚集開合。而六卵化為童子。容貌甚偉。仍坐於床。衆庶拜賀。尽恭敬止。日月而大。踰十余晨昏。身長九尺、(中略)其於月望日即位也。始現故諱首露。或云首陵。首陵是崩後諡也。国称大駕洛。又称伽耶国⁶⁾。

このように、駕洛国の初代王の金首露に纏わる誕生神話も、新羅の赫居世や高句麗の朱蒙の場合と同じで卵生の形をとっており、統治者を希う幾つの部族と人民がいる点などは、ことに赫居世誕生の様子と酷似している。無論、赫居世が生まれてくる卵の出所が不明瞭であるのに対し、首露の方は明確に天から紫色の縄が垂れて地に下り、その端には

4) 李丙燾校勘『原文三国史記』「高句麗本紀」第一(始祖東明聖王)、pp.129~130、乙酉文化社、1993

5) 亀何亀何。首其現也。若不現也。燔灼而喫也。

6) 注2)の巻二、奇異第二「駕洛国記」、p.81

六個の黄金の卵が入った箱のような物があったとする点は異なる。卵の数が六個であるというのは、卵から生まれた六人がそれぞれ六つの伽耶を治められるようになるためなのである。しかし、そうした差異はあるにせよ、生まれ方に限らず、容貌についても優れていることを語り、成長の速さや顔かたち、骨格なども傑出していることを仔細に描き、最初から支配者たる資格を兼ね備えていることを披瀝するなどパターンは基本的に同じなのである⁷⁾。韓国の建国神話は、初代王に絶対権力を象徴する者としての印象を賦与するために、誕生の奇異さと優れた容貌などを強調するパターンが取り入れられているということである。

それに対して日本の場合は、相応する神話において、誕生に纏わる神性が殆ど見られないといっても過言ではない。もし、あるとしても、その描写自体が神性を表すためのものとは即断できない面がある。例えば、須佐之男命は伊耶那伎命が黄泉国から逃れてきて穢れを清めるために禊をする際、鼻を洗うときに生まれた神で、生まれてから髭が胸元に伸びるまで泣き喚いたとあり、凶暴なところが見受けられるが、神性があるとは言いがたい。ただし、伊耶那伎命は須佐之男命を含めて三貴子が誕生してからすぐに高天原、夜之食国、海原の支配を命じるのだから、彼らを一人前の大人と見なしているとはいえよう⁸⁾。だが、須佐之男命は母のいる根之堅州国に行きたいと言って大人になるまで泣き叫び、青々と草木の生えている山を枯木の山にし、川と海の水を吸い取って干してしまうほどで、その声は禍をもたらす悪しき神のたてる物音と記している。

速須佐之男命、命させし国を治めずして、八拳須心前に至るまで啼きいざちき。其の泣く状は、青山は枯山如す泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以ちて悪しき神の音、狭蜷如す皆満ち、万の物の妖悉に発りき⁹⁾。

身体は立派だが精神的には未熟で、しかも父親の命令に従わず禍をもたらし、ついに伊耶那伎命の怒りを受けて追放されるわけである。その須佐之男命の英雄性は高天原から出雲に神遣らされ、高志の八俣の大蛇を退治するところに現れてくる。

大国主神に至っては、生まれる時の様子さえ描かれていないことがわかる。上山春平は、大国主神を神産巢日神から伊耶那美命と須佐之男命の系譜を受け継ぐ、根国系の

7) 鳥越憲三郎は、卵生神話は元来山東半島に居住していた倭族が韓半島の南部に渡来したことの名残で、一部が日本列島に渡って弥生文化を形成したものと述べている。ことに新羅の神話と駕洛国の卵生神話は、倭族みずからの神話を伝えるものとする。一方、倭族の日本の創世神話に卵生神話が見られないのは中国思想によって粉飾され、跡形もなく抹殺されたためと主張する。また、駕洛国の首露が中国の偉人に比すべき相を持つことを述べる部分は中国思想の強い影響とする。(鳥越憲三郎『古代朝鮮と倭族』、中公新書、1992、p.13・16・18・62～63など) だが、日本の神話に中国思想の影響が強いと言いつつも、韓国の神話に見られる主人公の偉人性の描写もなく、卵生の形も探り得ないことには少なからず矛盾が感じられる。

8) 吉田敦彦「スサノオ神話とホムチワケ・ヤマトタケル伝説」(『日本神話の特色』所収)、青土社、1989、pp.125～126

9) 荻原浅男校注・訳『古事記』「日本古典文学全集」小学館、1994、p.73

神とし、根国で生まれたことになるのかもしれないと言っている¹⁰⁾が、『古事記』からは誕生に関わる何の記述も探り得ない。

火遠理命においては、高天原から降臨する邇邇芸命と大山津見神の娘の木花之佐久夜毘売の間で生まれ、いわゆる高天原系と葦原中国系の神の間で生まれるわけだが、母親の木花之佐久夜毘売は邇邇芸命に、たったの一夜の交わりで身ごもったことを疑われながら産屋に入るなど、統治者として欠点の無い韓国のそれと比べて神聖さを欠く。たとえば、火遠理命の生まれる場面は、以下のようにになっている。

即ち戸無き八尋殿を作りて、其の殿の内に入り、土を以ちて塗り塞ぎて、産む時に方りて、火を以ちて其の殿に著けて産みき。故、其の火の盛に焼ゆる時に生める子の名は、火照命[此は隼人の阿多君の祖]。次に生める子の名は、火須勢理命。次に生める子の御名は、火遠理命、云々¹¹⁾

子供を出産するために塗籠のような室に入っている木花之佐久夜毘売の様子は、高句麗の柳花が室に幽閉され、そこで五升程の卵を産み、その中から朱蒙が生まれてくる話に似ているところもあるが、これから邇邇芸命に次いで支配者となる火遠理命の存在感という点では、韓国のそれと比べてあまりにも薄い。天孫を父親とし、大山津見神の娘を母親としていることに注目すれば、高貴な血筋を引いているに相違ないが、引用文で見ると、特別に支配者を印象付ける強烈さもなく、しかも、火の勢いが弱まった時点で生まれてくるのが火遠理命なのである。ここでの「火」は、焼畑農耕民の信仰のなかにある山の神の持つ呪力を表すものとする見解がある¹²⁾が、いずれにせよ、はじめは微弱な者として登場する点が、むしろ日本の神話の典型的な性格であるのかも知れない。誕生の様子が記されていない大国主神が、兄弟たちの八十神の従者になったり迫害を受けたりするところにも、同じ性格が見られる。

一方、火遠理命と豊玉毘売命との間で生まれる鵜草葺不合命は、天神の息子と海神の娘の間で生まれるわけで、大鰐の姿に身を変えた豊玉毘売命に生まれるなど、特異な誕生の形を見せてはいる。また他の箇所と比べ、出産にかかわる内容がもっとも長い物語を形成しているのだが、それでも、それが直接支配者の威厳を現すものになっているとは言いがたい。

「(前略)、天つ神の御子は海原に生むべからず。故、参出到れり」とまをしき。爾に即ち其の海辺の波限に、鵜の羽を以ちて葺草に為て、産殿を造りき。是に其の産殿未だ葺

10) 上山春平「古事記の神統譜」『神々の体系-深層文化の試掘-』所収、中公新書、1972、pp.10～29

11) 注9)のp.135

12) 吉井巖「海幸山幸の神話と系譜」、(『講座日本文学神話上』所収)、至文堂、1977、pp.138～140

き合へぬに、御腹の急るに忍びざれば、産殿に入り坐しき。爾に方に生まむとする時、其の日子に白して言はく、「凡て他し国の人人は生む時に臨れば、本つ国の形を以ちて産生むなり。故、妾、今本の身を以ちて産まむとす。願はくは妾をな見たまひそ」とまをしき。是に其の言を奇しと思ほして、其の方に産まむとするを窃に伺ひたまへば、八尋和迺に化りて、匍匐ひ委蛇ひき。即ち御驚き畏みて遁げ退きたまひき。爾に豊玉毘売命、其の伺ひ見し事を知らして、心恥づかしと以為ほして、(後略)¹³⁾

引用文は、死んだ伊耶那美命を連れ戻しに黄泉国を訪問した伊耶那岐命が、「見てくださるな」と言った伊耶那美命の戒めを無視して殿の中に入り、恐ろしくて異様な光景を目の当たりにして逃げる話に似る。確かに、鵜草葺不合命の出生は奇妙であり、父母の火遠理命と豊玉毘売命とがそれぞれ高天原と海原を統治する神の子である点で、神聖性は十分認め得るが、やはり、生まれてくる鵜草葺不合命の容貌や神性に焦点が合わせられているとは言い難く、むしろ、出産に纏わる独特な光景や二人の対話が内容の中心なのである。火遠理命が豊玉毘売命の「妾をな見たまひそ」と戒めたことを無視して産屋を見ることによって、豊玉毘売命の恨みを買ひ、豊玉毘売命が海の宮に帰っていくという内容になっているのである。

これまで見てきたように、多くの韓国の建国神話では、男の主人公は生まれる時から神性に満ち、知力と威厳を兼ね備えた人物として描かれ、終局において支配者として祭り上げられている。最初から支配者になることが運命づけられた存在として描き出されているのである。反面、日本の場合は、最初は泣虫だったり、凶暴だったり、あるいは柔弱なイメージを持って登場してくる人物が多い。英雄としての威厳や存在感を、そこにを見つけることは容易ではないのである。

三、成長過程と英雄の条件

そのような日本神話であるが、生まれたときはたいしたことのない存在が、迫害や流離によって試練を経、勇者に成長し、やがて統治者になったり、神として祭り上げられていくという点に特徴がある。一種の通過儀礼神話になっているのである。

勿論、韓国神話の男主人公に流離の様子がまったく見られないわけではない。だが、それが必ずしも通過儀礼のようなものになっているとは限らないところが日本神話とは異なるのである。韓国神話における試練は、支配者になるために受け入れねばならない試練というものではない。むしろ、征服すべき新しい土地を求めて本拠を離れるといった形の流離で

あるというのが妥当なのである。すなわち、支配者としての資格はあるが、王の嫡子や長子でない故に故郷を後にし、旅に出る。そこには謀殺の陰謀が絡んだりもする。しかし、そのような試練がなくても、彼にはすでに十分な霊力が備わっているため、流離の有無が統治を確固たるものにするわけではない。

反面、日本神話の場合、主人公は神性に満ちた生まれ方もしなければ、幼少年期に優れた霊験豊かな様子を見せることもない。ただ、前述したように、すべての存在において、流離を伴う試練が必須のものとして現われ、それがその存在を英雄にしていくのである。周知のように、須佐之男命、大国主神、火遠理命はみな流離体験をしており、流離を通じて目覚ましい変身を遂げている。つまり、条件的には支配者になれない存在が、流離とそれに伴う試練を乗り越えることによって、ついに権座に就いたり、偉大な神に成長したりするのである。詳細は省くが、そのパターンは平安時代の物語文学へと踏襲され¹⁴⁾、日本文学の典型を成しているのである。

さて、引用するまでもないが、須佐之男命は父神の伊耶那岐命によって海原を治めるように命じられるが、この命令に従わず、二回の追放の末、出雲に宮殿を造営したとある。大国主神は兄弟神たちの迫害にあい、紀伊国を経て根国へ逃亡して勇者に生まれ変わり、出雲の支配者となっている。火遠理命もやはり兄の火照理命との不和によって苦しみ、海神の宮へ渡ることになり、海神の力を借りて兄を屈服させ、権座に就くことになるのである。こうした話型は、おそらく主人公となる者が嫡子や長子ではないことに基因する場合が高いと思われるが、いずれにせよ、支配の正当性を生まれつき神性に比重を置く韓国と、未熟だった者が試練を通して英雄に生まれ変わるという変貌性に重点を置く日本とでは、明確な違いが認められるのである。

ところで、朱蒙の生まれる一連の過程と、天孫降臨の邇邇芸命から神武天皇までの葦原中国における完全な統治者が生まれるまでの過程を比較してみると、その婚姻関係に若干の違いが確認される。たとえば、高句麗の建国主の朱蒙は、天を象徴する勢力が河を象徴する勢力と婚姻関係を結び、その中から地上の統治者が生まれてくる。すなわち、「天(解慕漱：男)＝河(柳花：女)→地(朱蒙：男)」の方式である。一方、日本の場合は、「天(邇邇芸命：男)＝地(木花之佐久夜毘売：女)→天地(火照理命：男)＝海(豊玉毘売命：女)→地(鵜草葺不合命)→天皇」というように、天と地と海(あるいは河)の結びつきがより複雑なのである。日本神話の複雑さは、おそらく、完全で確固たる結合による王権であることを周知させるためのものであろう。

ちなみに、日本の神話においては、男の主人公に父母が存在する場合と、しない場合とがある。一概には言えないが、須佐之男命や倭建命のように性格が横暴な場合は、父親

14) 平安文学への受容にかかわる詳細については、拙稿の「物語の流離論-迫害と逃亡の深層-(韓国語)」(『日本語学』第40輯、pp.79~98)を参照されたい。

の登場はあっても、母親は既に他界の人になっていたり、最初から言及がなかったりする。一方、性格が温厚な大国主神の場合は父親の存在が見られず、逆に母親の登場が見られるのである。しかも、須佐之男命や倭建命は、その父親によって追放されたり、遠隔地へ派遣されたりする立場である。父親というのは権力の最上位に君臨する存在であり、その父親による追放や派遣というのは、後継者にはなれないという強い暗示であろう。それに対して、父親が不在で、母親だけが登場するというのは、今のところ権力の座は空席で、いずれ主人公がその座に就くことが暗示されるのである。

韓国の神話と日本の神話のもう一つの差異を挙げるとすれば、権力の座に就く時、どういう味方がつくかの違いである。例えば、桓雄や朱蒙の場合、離郷する時、同行や引率される勢力が存在する。桓雄ならば、風伯と雨師、雲師を率いて地上に降りてくるのである。ただ、桓雄の離郷は天孫降臨であり、天帝釈の桓因の認めたものだから、部下を引率するのは特別なことではなかったのかもしれない。

高句麗の朱蒙の場合是一种の逃亡の形を取っているが、最初から烏伊・摩離・陝父の三人を友として行く。金蛙王には七人の息子がいて、長子の帶素と臣下などが朱蒙を殺すために謀議するのを母親の柳花が知り、逃げるようにと勧め、三人の友と共に扶余を離れていくのである。

朱蒙乃与烏伊・摩離・陝父等三人為友、行至淹通水一名蓋斯水、在今鴨綠東北、欲渡無梁、(後略)¹⁵⁾

詳細は省くが、高麗時代の文人の李奎報が散逸した「旧三国史」を基にして書いたとされる『東国李相国集』の中の「東明王篇」¹⁶⁾には、朱蒙自らの決断で扶余を離れる内容になっており、『三国史記』と『三国遺事』より自己の強い意志が示されている。しかし、ここにも朱蒙には三人の友がいることが記されており、その点は変わらない。

さらに、朱蒙が毛屯谷というところに到ると、再思・武骨・黙居の三人が加わり、朱蒙はそれぞれに、克・仲室・少室の氏を下賜し、随行させている。扶余を離れる時から同行した三人と比べ、こちらの三人はより具に描かれており、朱蒙は彼らを賢人とし、天賜であるとさえ述べている。彼らの手助けによって朱蒙は勢力を伸ばすことになり、ついに国を築き上げることができるのである。

15) 注4)のp.130

16) 李奎報の『東国李相国集』第三卷に所収する「東明王篇」は、高句麗の東明王に関する伝説を五言詩体にした叙事詩で、原作者や制作された年代は未詳である。五言282句からなる韻文体の漢詩で約四千字に及ぶ。これは記事体文学の先駆をなしている。(李奎報・李承休著、朴斗抱訳「東明王篇・帝王韻紀」乙酉文化社、1974)

朱蒙行至毛屯谷魏書云至、音述水、遇三人、其一人着麻衣、一人着衲衣、一人着水藻衣、朱蒙問曰、予等何許人也、何姓何名乎、麻衣者曰、名再思、衲衣者曰、名武骨、水藻衣者曰、名默居、而不言姓、朱蒙賜再思姓克氏、武骨仲室氏、默居少室氏、乃告於衆曰、我方承景命、欲啓元基、而適遇此三賢、豈非天賜乎、遂揆其能、各任以事、与之俱至卒本川魏書云至川紇升骨城、¹⁷⁾

つまり、朱蒙は最初から支配者となる先天的な力を具えている上、従者あるいは同志がいて、主人公を護衛したりするなど手助けする者も存在する。リーダーとしての強靱な指導力と人徳とが兼ね備わっていることが示されており、支配者になる過程の現実性が明らかなのである。

同様のことは、新羅と駕洛国の建国神話においても言えるもので、新羅の場合、辰韓の六部族の祖上たちが子弟たちと共に闕川岸上に集まり、百姓を治めてくれる君主を希う時、赫居世が生まれてくるわけだから、臣下などの助け人がはじめから存在することになり、権力者としての資格が賦与されているのである。天から降りてきた卵の中から王となる首露が生まれてくる駕洛国の話においても、九干によって統治者としての威厳が持たせられており、赫居世の神話とほぼ同様の構造を呈しているといえよう。

一方、日本の場合、流離する須佐之男命や大国主神・火遠理命・倭建命は全て単身である。高天原から追放され、出雲の肥河に下りてきた須佐之男命は、生まれた時点から独り身であり、追放されたときも同様に、同行の者が一人もいないのである。しかも八俣の大蛇を退治し、櫛名田比売を妻にして宮廷を造営する時も、櫛名田比売の老父母の他に部下などの助け人は見当たらない。大国主神や火遠理命の話においても、同じことがいえるのである。手助ける存在がまったくないとは言わないが、流離や試練に同伴者はいない。

倭建命の場合、『日本書紀』には兵士を連れて行ったとある¹⁸⁾が、神話性の強い『古事記』の叙述では、単独で西国と東国の平定に当たっていることがわかる。そこには、男の主人公が完璧な勇者に生まれ変わるためには、人間の助け、とくに男性の助力は純度を低めることになるという意識が反映されているのであろうか。須佐之男命が八俣大蛇を退治するときも、大国主神と火遠理命が八十神と火照理命を征圧する際にも、同志はいない。

しかし、同志や統治者として迎え入れる人民はいないかわりに、流離先で男の主人公を助ける妻となる女性の登場がみられ、最終的には強大な権力を持った女性の父親の力が男に伝授されるというのは、日本神話に見られても韓国のパターンにはない特徴である。こ

17) 注4)のp.130

18) 坂本太郎外校注『日本書紀(二)』巻七、景行天皇二十七年十月条・四十年七月条、岩波書店、1994、p.84-94

こでの女性は、主人公と神的存在の媒介をする役割を果たすという点で、男の支配の当為性を刻印させるための装置になっていると理解できる。その上、大国主神と火遠理命にとって、それぞれの必然的な助力者となる須勢理毘売と豊玉毘売の二人の女性は、前者が根国の主である須佐之男命の娘、後者が海宮の海神の娘なのである。すなわち、権力者の絶対的な支援がそこに約束されていることになるのである。

それに反して、韓国の場合は、多くの男から尊敬を集め、指導力を備えている男子に、むしろ支配者に適しているという性格づけがなされているように思われる。もっとも、随行する男たちに囲まれている分、神話性は薄くなっていると言えよう。

もう一つ興味深いのは、日本の場合、呪具や道具を用いて困難を乗り越えたり、抑圧していた者を退治したり屈服させたりする形態のものが多く見られることである。それは性格が横暴であれ、温厚であれ、共通してみられることである。黄泉国から逃亡する伊耶那岐命が、追ってくる醜女に向かって、髪につけていた黒い木の蔓の輪を取って投げると野葡萄が生えたり、櫛の歯を折って投げると竹の子が生えてきたりして、醜女がそれらを食べている間に距離を広げることができるのである。また、追っ手の鬼の軍勢に向かって桃を三つとって投げると退散した、という記述がある¹⁹⁾。須佐之男命が八俣大蛇を退治する時も、何回も醸した酒を利用して大蛇を酔わせて退治するのである²⁰⁾。厳密に言えば酒は呪具とはいえないが、勝負の形が武器による決闘の仕方ではなく、何かの道具を用いるという点で特徴があるといえよう。

根国に赴いて須佐之男命によって蛇と蜈蚣の室に入れられる大国主神の場合も、須勢理毘売の渡す領巾の呪力で危機を脱し、須佐之男命から盗んだ生大刀と生弓矢で八十神を追い退け、国作りを始めている。

其の蛇の室に寝しめたまひき。是に其の妻須勢理毘売命、蛇のひれを其の夫に授けて云はく、「其の蛇昨はむには、此のひれを三たび挙りて打ち撥ひたまへ」といひき。故、教の如せしかば、蛇自ら静まりき。(p.97)

其の妻須勢理毘売を負ひて、即ち其の大神の生大刀と生弓矢と、及其の天の沼琴をとり持ちて逃げ出でます時、(中略)故、爾に黄泉比良坂に追ひ至りて遙に望け呼びて、大穴牟遲神に謂りて曰ひたまはく「其の汝が持てる生大刀・生弓矢を以ちて、汝が庶兄弟をば坂の御尾に追ひ伏せ、亦河の瀬に追ひ撥ひて、おれ大国主神と為り、云々」(pp.98~99)²¹⁾

つまり、己の力で正々堂々と闘って困難を乗り越えるのではなく、女性の呪力と他人から

19) 注9)のpp.64~66

20) 注9)のp.88

21) 注9)のpp.97~99

盗んだ武器を用いることで権力の座に上り詰めたことになるのである。火遠理命に至っては、妻となった豊玉毘売の父親の海神から受けた塩盈珠と塩乾珠を用いて、兄の火照理命を水に溺れさせたり生かしたりしながら征圧する²²⁾。海神は水を掌る神で、火照理命の農事を妨害して貧窮に陥れ、窮極には火遠理命に恨みを持たせ、自ら攻めてくるようにし、そのとき珠を持って屈服させ、火遠理命の制圧を妥当なものにするという論理になっているのである。何れにせよ、自ら生まれつき持つ実力の発揮は全く見られない。

『古事記』の中巻に、西国の熊曾建の兄弟を服従させるために、景行天皇によって皇子の小碓命が派遣される場面がある。そのとき彼は、叔母にあたる斎宮の倭比売命の衣装をもらい、剣を懐中に潜めて行く。さらに征伐の様相を見ると、叔母からもらった服を着て女装をし、酒宴に混じりこんで熊曾建兄弟の真ん中に座る。そして宴が最高潮に達したとき剣を取り出して、兄弟を刺し殺すのである。須佐之男命が八俣大蛇を退治する時と同じく、酒を用い、詭計をめぐらすということがここでも功を奏している。熊曾建の兄弟を征圧し、帰る道に山の神と河の神、穴戸の神を服従させ、出雲国に寄って出雲建を殺すのであるが、ここでも相手の刀を木刀にすり替えてだまし討ちにするのである。鈴木日出男はこれを英知の勝利と見なしている²³⁾が、やはり卑怯な手段であるに違いない²⁴⁾。しかしながらこれらの話は英雄譚を成し、名高い物語に祭り上げられている。

それに反し、韓国の朱蒙が高句麗を建国し、沸流国を服属させる時の様子を見てみると、まず朱蒙は沸流国の国王の松讓に附庸となることを求められる。朱蒙はそれに憤怒し互いに是非を論ずるが、結局、弓の技量を争って優劣をつけることになる。そこで朱蒙が勝つことによって、松讓は国を挙げ降伏し、沸流国は多勿都となり、松讓を郡主に封じられるのである²⁵⁾。朱蒙は勇敢で武術にも優れているが、敗者にも寛大なところを見せ、最初から最後まで一点の非の打ち所もない者として描かれているのである。それに比べると日本の英雄は相手の隙を狙って征圧する形を見せ、韓国とは異質な話型を保っていると言えるであろう。

22) 然而其兄作高田者、汝命營下田。其兄作下田者、汝命營高田。為然者、吾掌水故、三年之間必其兄貧窮。若恨怨其為然之事而攻戰者、出塩盈珠而溺、若其愁請者、出塩乾珠而活、云々 (注9)のp.144)

23) 鈴木日出男『王の歌—古代歌謡論—』第一章「倭建の流離物語」、筑摩書房、1999、pp.4~5、「これは姑息の手段を意味しない。前記の女装によるだまし討ちをも含めて、古代の英雄を英雄たらしめる、英知の勝利を意味するとみななければならない」

24) 即入坐出雲国、欲殺其建而、到即結友。故窃以赤楸作詐刀、為御佩共沐肥河。(注9)のp.216)

25) 王見沸流水中有菜葉遂流下、知有人在上流者、因以獵往尋、至沸流国、其国王松讓出見曰、寡人僻在海隅、未嘗得見君子、今日邂逅ア相遇、不亦幸乎、然不識吾子自何而來、答曰、我是天帝子、夾都於某所、松讓曰、我累世為王、地小不足容兩主、君立都日淺、為我附庸可乎、王忿其言、因与之鬪弁、亦相射以枝芸、松讓不能抗。(中略)松讓以国來降、以其地為多勿都、封松讓為主、(注4)のp.130)

四、おわりに

以上で見てきたように、韓国と日本の建国にかかわる神話において、幾つかの明確な違いが存することがわかる。まず、韓国における建国主の誕生にまつわる神話を見ると、誕生を前後して主人公の神性が強調され、血統はもちろん、奇異なる出生の仕方とともに、傑出した容貌や優れた技量が浮き彫りになっている。最初から支配者になるべく資格を纏っているような印象を与えるのである。そのことは新羅の赫居世、高句麗の朱蒙、駕洛国の首露について共通に言えることで、日本神話に対しての韓国神話の特徴と言ってよいだろう。一方、日本の場合は、主人公の生まれる様子さえ記されていないことがあり、誕生にまつわる物語においては際立った英雄性もなければ、容貌に関する描写も採り得ない。むしろ、勇者には程遠く、あまりにも温厚であったり優柔不断であったり、非英雄的性格の持ち主であることが多く、決して支配者にはなれないような、弱者としてのイメージが強い。

ところで、主人公の成長の過程や支配者へと変貌する過程にはもう一つの違いが見て取れる。韓国の場合、『東国李相国集』の「東明王篇」には、朱蒙が生まれて一ヶ月も経たない内に言葉を発したとあり、七歳の時に弓矢を作って射ると百発百中で、狩にも卓越した技量を誇ったとあるし、また詳細は書かれていないが、非凡な成長過程に関しては駕洛国の首露においても同様なのである。卵から出てきた首露は十日余りで身長が九尺にもなったとあり、その容貌も中国の歴代の英雄に似ていたとある。つまり、誕生の時から王の風貌を有していて、権座に就くのは生前からの定めであったという語り方なのである。

ところが、日本の場合、成長の過程といえば、兄弟に迫害を受けて逃亡する大国主神や火遠理命は、流離先で偉大な神の娘に出会い、その娘の献身的な助力によって神の力を手に入れ、英雄に生まれ変わるという展開になっている。英雄とはいえ、自分の努力で養った力というより、最後まで他人の助けや他人からもらった呪具などを用いて支配者になるという独特な展開を構築しているのである。また、罪を犯して追放されたり、派遣されたりする須佐之男命や倭建命は、流離先で出会う敵となる存在に真正面から闘いに臨むのではなく、酒の力を借りたり、女装したりなど、相手を騙し殺したり、相手の本物の刀を木刀にこっそり取り替えて殺したりというような卑怯な手段を用いている。

こうした点で、日本神話における英雄譚は韓国のそれと大きな隔たりを見せているのである。韓国のように本人の強大な力と王に擁立しようとする勢力の有無より、流離や助ける女性と女性の父親である偉大な神の加護によって英雄は誕生する。これが日本型の英雄神話である。須佐之男命と倭建命の場合は、自らの力で敵を征圧するにはちがいないが、それでも真正面からの対決によってではなく、詭計をめぐらすという手段を用いている。あくまで、英雄のタイプが異なるのである。

【参考文献】

- ・ 荻原浅男校注・訳(1994)『古事記』(「日本古典文学全集」)、小学館
- ・ 坂本太郎外校注(1994)『日本書紀(二)』(「日本古典文学大系」新装版の文庫本)、岩波書店
- ・ 李丙燾訳註(1992)『訳註原文三国遺事』、「古朝鮮王倭朝鮮」「駕洛国記」、乙酉文化社
- ・ 李丙燾校勘(1993)『原文三国史記』、「高句麗本紀」第一(始祖東明聖王)、乙酉文化社
- ・ 李奎報・李承休著、朴斗抱訳(1974)「東明王篇・帝王韻紀」、乙酉文化社
- ・ 上山春平(1972)「古事記の神統譜」(『神々の体系—深層文化の試掘—』所収)、中公新書、pp.10~29
- ・ 大林太郎(1977)「日本神話と朝鮮神話—支配者文化を中心として—」(『講座日本文学神話下』所収)、至文堂、pp.56~57
- ・ 吉井巖(1977)「海幸山幸の神話と系譜」(『講座日本文学 神話上』所収)、至文堂、pp.138~140
- ・ 吉田敦彦(1989)「スサノオ神話とホムチワケ・ヤマトタケル伝説」(『日本神話の特色』所収)、青土社、pp.125~126
- ・ 鳥越憲三郎(1992)「朝鮮神話の系譜を探る」(『古代朝鮮と倭族』所収)、中公新書、p.13・16・18・62~63など
- ・ 鈴木日出男(1999)「倭建の流離物語」(『王の歌—古代歌謡論—』所収)、筑摩書房、pp.4~5
- ・ 関丙勳(2009)「物語の流離論—迫害と逃亡の深層—(韓国語)」(『日本語文学』第40輯所収)、韓国日本語文学会、pp.79~98
- ・ _____(2010)「韓国から見た出雲神話—大穴牟遲神話の特色」(『出雲文化圏と東アジア』所収)、勉誠出版、pp.18~26

要 旨

韓国の建国始祖の誕生に関わる神話を概観すると、誕生を前後に主人公の神性が強調され、血統はもちろん、奇異なる出生の様相とともに、傑出した容貌や優れた技量が浮彫りになっていることがわかる。最初から支配者たる資格を賦与していることが見て取れるのである。これは新羅の赫居世、高句麗の朱蒙、駕洛国の首露に共通して表れているものである。

一方、日本の神話には主人公の誕生に纏わる神話さえ見当たらぬものがあり、誕生に関わる記録にも目立つ英雄性が確認できず、容貌についての描写も見出せないことが多い。むしろ、勇者とは掛け離れており、温厚すぎたり優柔不断だったり、支配者の面貌が不在した場合と、あるいは正反対に、横暴すぎて、勇者の風貌は具えているが聖君としてのイメージに致命的な欠陥を見せる場合とがある。

そして、主人公の成長の過程と支配者への変貌の過程にもう一つの相違点を確認される。『東国李相国集』の「東明王篇」は、朱蒙が生まれてまだ一ヶ月も経たない時期に言葉を発したと書いており、七歳には弓矢を作って射ると百発百中で、狩りにも卓越した技量を誇ったと記している。駕洛国の首露は十日余りで身長が九尺にもなり、その容貌も中国の歴代の英雄に似ていたという。すなわち、誕生の瞬間から王としての風貌を兼ね備えており、権座に上るのは生まれる前からの定めのように語られているのである。

しかし、日本神話における英雄の成長過程に注目すると、兄弟に迫害を受けて逃亡する大國主神や火遠理命は流離先で偉大な神の娘に出会い、その娘の献身的な助力によって神の霊力を手にいれ、英雄に生まれ変わるというような展開を見せている。英雄とはいえ、自分の努力の賜物というより、最後まで他人の手助けや他人から貰った呪具などを利用して支配者になるような独特の様相を帯びているのである。主人公の生まれつき強大な力と、王として擁立しようとする勢力を前面に出している韓国とは違い、日本は流離と女性の助力、そして女性の父親である偉大な神の加護によって英雄が誕生するようなパターンのものである。一方、須佐之男命と倭建命のように、武勇譚で主人公の能力が強調されている場合があるが、敵を制圧する過程で正攻ではなく騙し打ちをしている点で韓国の武勇譚と区別される。

キーワード：建国神話、神、英雄、誕生、成長、神格、神性

투 고 : 2010. 11. 30

1차 심사 : 2010. 12. 11

2차 심사 : 2011. 1. 08